
Destiny love

syon

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Destiny love

【Nコード】

N5925Z

【作者名】

syou

【あらすじ】

——「それが運命なら、神様は見捨てない。絶対に」

彼女が封印を解いた時、二人の運命は動き出す。

prologue

- プロローグ -

「大丈夫、霧は晴れるよ。明けない夜が無いようにね」——叶野三郎『四人と宝』

忘れなきゃ、忘れなきゃ。

私は、彼にもらった原稿用紙を本棚の奥に隠す。ずかんの後ろに入れておけば、気づかないだろう。

胸が、ぎゅつとした。苦しい、いたい。それと同時に、彼の顔を思い出す。そしてまた苦しくなる。

「あきらめなきゃ、いけないんだ……」

手に持っている写真に、ぽとつと涙が落ちた。弱い自分を内心で怒る。なさけないじゃない、私。しょうがないでしょ、もう逢えないんだから。

国語辞典に彼と二人で映る写真をはさむ。そのページの単語に『恋』があつた。私は見ない振りをして国語辞典を閉じた。

「これで、おしまい」私はそうつぶやく。

「嫌だ」と誰かの声が聞こえた。私の声だった。

12月19日

- 十二月十九日 -

「隠したって見つかるんだ。無駄な事はやめておけよ」——叶野三郎『四人と宝』

ドアが開く。

その音で、何が足りないのかを考えていた私の思考は中断される。机に座る私は、顔を黒板側のドアへ向ける。そこには、私を見て穏やかに微笑む彼がいた。

「少し、遅くなつたな」

そこには私の彼氏——幹夫^{みきお}がいた。

「待たせすぎ！ 五分は待ったよ」五分ということを強調するため、私は手をパーの形にして彼に見せる。

「五分くらい許してくれよ」幹夫は苦笑する。

「幹夫わかつてる？ 高校生カップルにとって放課後の五分って言うのは、すぐく大切なものだからね」今度は大切さを強調させる為、椅子から立って仁王立ちになる。

「はいはい。申し訳ありませんでしたー」彼が気持ちのこもっていない謝罪をする。その態度に少し苛立つ。

「何その謝り方！ うざー」

「俺なりの愛の印だよ」

「そんな愛ならいりません」彼を鋭く睨む。彼の、こういう空気の読めない所が嫌いだ。

「冗談だよ」

「わかつてる」

彼が口を閉じた。何でこんなに怒っているんだ、という顔をしている。幹夫の所為でしょうが。

「あのさ、今日お金何円くらい持ってる？」

「貯金中」

「じゃあさ、これからデートしない？」こいつは話も聞けないのか。私は呆れる。

「貯金中って言ったでしょ。馬鹿じゃないの？」

「あそこのココア、美味しいよね」

恐らく幹夫は、私がそれで釣れると思ってているんだろう。確かにC・C・Cafeのココアは美味しいが、何と浅はかな。

彼が自信満々の顔でこちらを見ている。私は心の中で溜息をついた。しょうがない、乗ってやるか。

「まあ、奢ってくれるなら行ってあげてもいいよ？」

幹夫がにやにやと私を見る。「相変わらず素直じゃないなあ」その言い草に少し苛立つ。私があんたの提案に乗ってあげたんですけど。

「うるさい！ 行くんでしょ」私は机の横にかけてある茶色のバッグを背負う。

「それじゃあ行こうか」彼がそう言って、私の手を握る。まったく、調子がいいんだから。

落書きで埋まった黒板、色褪せほつれているカーテン。それらにさよならを告げて、私たちは教室を出る。

木製のドアを開けると、鈴の心地よい音がした。

「お、いらつしやい」マスターの東野さんひがしのがグラスを拭く手を止めて、こちらへ軽く手を上げる。

「お二人さんいらつしやい」中羽さんがメニューを持ってこっちへ来る。今日は灰色のカーディガンに、黒の膝下スカートを着ている。中に着ているフリルをあしらったワイシャツが可愛い。実年齢より幼く見える外見に、その洋服が良く似合っている。

「席は、いつもの所でもいいんでしょう？」

「ええ。お願いします」幹夫がそう言うと、中羽さんは私たちをい

つもの席へ案内する。中をちらつと見る限り、どうやら私たち以外お客さんはいないようだ。

店内を見渡す。お店の中の大半の物が木で作られているからかとても落ち着く。前にマスターが「テーブルも椅子もキッチンもマグカップも木製だろ？　ここまで揃えるのには苦労したよ」と言っていたことを思い出す。

中羽さんは窓側の二つの席を引いて軽くお辞儀をする。

「はいどうぞ。飲み物もいつもの？」

「はい。お願いしまーす」

中羽さんは幹夫のオーダーを聞き、私たちの席から去っていく。軽快なジャズが店内に流れている。それに合わせるかのように、時計の秒針が音を鳴らす。

無言の空間。中羽さんとマスターはせっせとドリンクの用意をしている。幹夫はぼーっと外を見ている。私は、携帯を開いてメールが来ていないかを確認する。――新着メール、無し。私は携帯を閉じる。

相変わらず幹夫は外を見ている。何と気が利かない彼氏だろうか。じろつと彼を睨む。

「はいどうぞ」中羽さんが頼んだドリンクを持ってくる。ミルクティーとココア。頼んだものがすぐに届く。これこそがこの喫茶店の売りだと私は考えている。中羽さんはにこつと微笑んでカウンターへ戻っていった。

幹夫はまるで彫刻にでもなったかのように、ずっと動かず外を見ている。いつも陽気な彼が喋ったり動かないでいると、少し不安になる。気分が沈んでいるんだろうか。

「ねえ、幹夫？」

彼の体が、さながら抜けかけていた魂が体に戻ったかのようにぴくっと動いた。そして、今まで外を見ていた目を私に向ける。「どうしたの？　華奈子」

少し虚ろな目。どうしたんだろうか。

「ミルクティー、来たよ」

ぼーっとミルクティーを見る幹夫。寝かけていた人が起きた時のような、そんな感じた。

「幹夫？」

「お、おう」彼は、微笑んだ。けど、無理をしているのがわかる。

「……どうかしたの？」

「いや、ちょーっと考え事をね」そう言っただけ彼はミルクティーを飲み始めた。

私もココアを飲むことにした。そのままでは熱いので、スプーンでココアをかきまわして冷ましていく。カカオの香りが、ふわっと広がる。その香りに、頬が緩む。

カップを触ると、まだココアは熱かった。これではまだ飲めないので、息を吹きかけて適温に冷ましていく。数度吹きかけた所で、そろそろ大丈夫だろうと私の感覚が告げる。取っ手を持って、恐る恐る口に近づけていく。カカオの香りが濃くなる。香りを味わいつつ、私はココアに口をつけた。

舌がひりつとした。どうやら、まだ熱かったらしい。その後すぐに、心地よい甘味が口を支配する。ココアは喉元を通り、体中にその甘さと温かさを広げていく。至福の一時とはまさにこのことだな、と感じる。

「そう言えばさ」幹夫が口を開いた。いきなりのことだったので私は驚く。私に声をかけたのか疑問に思い彼の顔を一瞥すると、幹夫の視線はカウンターへ向けられていた。

「どうした？」マスターがカップをカウンターに置いた。中身は見えないが、恐らくコーヒーだろう。マスター曰く「夕方辺りになると眠くなるんだよな」と欠伸をしながら言っていた事があった。何故それを客の私に言ったかは、今でも分からない。

「今日の二択って、何？」

「今日は『車かバイクだったら、どっちが好き？』だ」

今日の二択とは『林檎と蜜柑ならどちらが好きか』のような二択

問題を毎日マスターが考えてお客さんに出すという、お喋りが大好きなマスターらしい企画だ。どちらに投票されたかはちゃんと集計され、投票が多かった方の選肢を選んだお客さんは、次回来店時に一割引になるというサプライズもついている。

「あれ？ 前回はどうだったの？」やはり女声の性からか、私は一割引の行方が気になった。

「ミッキー達、前回来たのっていつだったけ」中羽さんが宙を見つめて、右の人差し指をあごにつけた。その仕草が可愛くて、私も自然にこういうのが出来る大人になりたいと思った。

幹夫が財布を鞆から取り出し、その中からC・C・Cafeのポイントカードを抜き取る。恐らく、前回来た日付を見ているんだろう。「ポイントカード見ると、今月の七日ですね」

今月の七日。私は頭の中にカレンダーを思い浮かべ、そこから記憶群に検索をかける。すると、臍氣にその日と思われる一場面を思い出してきた。

周りのみんなが騒いでいて、私は背伸びをしている。私も含めて全員達成感のある顔をしている。黒板には時程のようなものが書いてあり、その横に現代文や英語などが書かれている。

——期末テストの最終日か。そのことに気づくと、その日の記憶を断片的に思い出して行く。ああ、確か幹夫が「テスト終わりに一杯行かない？」とか言って私をここに誘っていた気がする。

「おお、七日ね」そう言ってマスターはレジの引き出しから、一冊のノートを取り出した。表紙に『今日の二択集』と書かれている。マスターはぱらぱらとそれをめくっている。

「マスター、何やってるんすか？」幹夫が訝しげな目でマスターを見る。

マスターがノートから視線を幹夫に移す。「今、華奈子ちゃんと幹夫くんが前回来店した時の『今日の二択』と、その解答を調べてるんだよ。ほら、レジでいつも会計終わったら書いてるだろ？それがこれだよ」ああ、あれってそうだったんだ。私はマスターの

あの行動に納得する。

「おお、あったあった」マスターが目当ての場所を見つけたらしく、ページをめくる手を止めた。「前は、コーヒーか紅茶だったらどっちが好きな二択だな。幹夫くんが紅茶で、華奈子ちゃんがコーヒーだな」

「で、どっちが多かったんですか？」私はちょうどよく冷めたココアを一口飲む。やっぱり美味しい。ココアは冷めても味が変わらず美味しいからすごいと思う。

「コーヒー。ということで、華奈子ちゃんが一割引」

「お、ちよつと嬉しい」何と言うか、バスケットで適当に放ったシュートがゴールに綺麗に入った時に似ている。私はふとそう思った。

そう思ってから、今日の支払いは幹夫だったと気づく。私の小さな幸福が消えていく。まるで、シュートが決まったのに実はダブルドリブルだったようだ。

「で、お二人はどっちに投票する？」マスターはそう言って、ノートをレジの引き出しに戻した。

「絶対車でしょ」

「絶対バイクでしょ」

私たちの声が重なる。

「えー！ バイクとかありえないでしょ」私は幹夫に指を指す。何で事故に遭ったら滅茶苦茶痛そうな乗り物に乗らなきゃいけないのか。車の方が安全じゃないか。

「いやいやいや。車の方がありえないから」幹夫が私に指を指し返して反論した。ありえないわけがない、と心の中で反論する。

「やっぱりバイクよね。ミッキーはわかってるな」中羽さんが幹夫に同意した。何であんな痛そうな乗り物を好むんだ、と不思議に思う。

「絶対車だな」マスターはきっぱりと大声でそう言った。どうやら断固として譲らないようだ。

「ですよね、東野さん」私は思わず身を乗り出した。同志が見つ

ったので、私は少し嬉しくなる。

「俺はさ、喫茶店のマスターをやる前は、月夜の狩獵豹チーターと呼ばれてたんだぜ？」マスターは自慢げにそう話し出した。何だろう、すごく格好悪い。

「何、月夜の狩獵豹って」苦笑しながら幹夫を見る。何と言うか、父親が昔のことを自慢しているときのような感じた。すごく事実を歪ませているのをわかっていているんだが、ちゃんと聞かないと機嫌を損ねる。大雑把に言くと、そんな感じだ。

どうやら幹夫もわからないらしく、右手を振って『わからない』のジェスチャーをした。

「昔は走り屋だったんだよ、俺」満面の笑みで話し始める。「深夜に仲間で集まってゼロヨンしたりして、月夜中を警察に追われながら走ったもんだよ」マスターが顔を綻ばせながら一人で頷く。その時のことを思い出しているのだろう。

「華奈子ちゃん、大丈夫よ。いつもの嘘だから」中羽さんが笑顔でそう言う。やっぱりか、と私は心の中で呟いた。

「お前さ、信じてくれよ。本当なんだって」

「嘘に決まっているじゃない」中羽さんがきっぱりとそう言い切った。「あんた、免許は何色？」

「ゴールド」

「警察に捕まったことは？」

「お世話になったことは一度も無い」

「あのね、和行かずゆき」中羽さんが溜息混じりに、マスターのことを下の名前で呼ぶ。「走り屋だったら、スピードの出しすぎで警察に一度くらい捕まっててもおかしくないわよ」

確かに、警察に追われているんだったら何回か捕まっていってもおかしくは無い。私は中羽さんの主張に頷く。

「いつも逃げ切っているんだよ」当たり前だろうが、とマスターは胸を張った。

「いや、胸を張るところじゃないでしょ。そこ」幹夫がすかさず突

っ込んだ。

「そうよそうよ。事故とかに遭ったらどうするのよ」

「そこで事故を起こさないようにするのが、プロの走り屋なんだよ」
またマスターは一人で頷き始める。

「走り屋にプロもアマチュアも無いでしょうが」はあ、と中羽さんは大きく溜息をついた。

「いや、こう熟練したテクニックを持つ俺みたいな」

中羽さんが、マスターの言葉を強制的に遮って「あのね、和行。プロとアマチュアの違いつて何か知ってる？」と引き攣った笑みで聞いた。

まるで、調子に乗っている息子を笑顔で叱る母親のようだ。私は、今の中羽さんを見てそう感じた。

幹夫が私を見ていることに気づく。私は幹夫と目を合わせる。私は「どうしたの？」という視線を彼に送る。

「母親が子供を叱ってるみたいだね、あれ」

「やっぱり、幹夫もそう思った？」あの光景はどうみてもそれにしか見えない。

結局、その親子喧嘩はかれこれ十分後に、マスターが「嘘ついてごめんなさい」と頭を下げたことで決着をつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5925z/>

Destiny love

2011年12月19日21時47分発行